

53. 《東京への改称》

1867年（慶応）11月9日、大政奉還。しかし国論を2分した対立は、翌1868年1月27～30日、鳥羽伏見において、幕府側 対 薩長連合側の戦いに発展。（注1）

このとき、薩長連合側は、官軍の旗を掲げて勝利。そして新政府軍（官軍）は江戸に向かいます。その最中、大久保利通（注2）は、大坂を首都にするべく、1868年（慶応4）2月16日、大坂遷都を建議します。

いよいよ、江戸城総攻撃が3月15日と決まり、事態は緊迫。その前日に、江戸の薩摩藩邸において、幕府側の勝海舟と新政府側の西郷隆盛の会談が行われ、交渉は無事成立。

こうして1868年4月11日、江戸城無血開城が実現しました。この会議に当って、勝海舟は、交渉決裂を想定し、徹底抗戦に備え江戸焦土作戦を立てていました。（注3）

新政府は、7月17日、大坂ではなく、江戸への遷都を決定し、9月3日、江戸を東京と改称します。（注4）ここに、江戸は日本の首都東京として、また武蔵国は1府8県（廃藩置県後）として再スタートを切りました。

東京には、外国を視察した有能な人材が終結し、江戸時代以上の行政経済パワーを発揮できる都市として再び蘇ったわけです。（注5）。

遷都以降、関東は、天変地異続発の幕末とは打って変わり、数十年間、大規模災害なき平穏な時期が続きました。この幸運に恵まれたことにより、関東の中心にある東京は、近代国家の首都として威容と実力を培うことができました。

翻って、江戸時代は、幕藩体制という連合国家でした。日本全体を鎖国できたのは、関東を領有する幕府が、諸藩に対して圧倒的な軍事・経済力を持っていたからでした。

欧米は、1648年のウェストファリア条約で登場した国家主権（注6）の概念を熟成させ、国家間の条約締結に慣れていました。

幕府の拠点である関東は、天明噴火等天変地異で人口が減り、諸藩を従わせる経済力・軍事力も低下。そこにペリーが来航し、国家主権の概念もない幕藩体制の弱点が露呈します。薩摩藩は、幕府が和親条約や修好通称条約を専横的に締結したのはけしからん、条約締結の国家主権は天皇にあると問題提起したことになります。（注7）

そして、ペリー来航以降14年目に、中央集権の近代国家に変わったわけです。

また、砲艦外交により弱腰にならざるを得ませんでした。蒸気船の国産化も12年目に成し遂げています。この対応の速さと能力は、日本民族の底力とでもいうのでしょうか。

さて、「武蔵国・江戸物語」は、思わぬ長編シリーズになってしまいました。東京オリンピックを迎えるに当たり、これからの国や地域やまちづくりの参考にいただければと、武蔵国・江戸から見た歴史の断片を綴ってまいりました。最後に、皆様の議論の素材になれば望外の幸せであることを申し添え、この物語を終わります。

注1：鳥羽伏見の戦いは、1868年1月27日・30日に戦われたもの。大政奉還後、朝廷内部において、薩長側のロビー活動に、徳川慶喜側が負けて討幕となりました。慶喜は、朝廷に恭順の意を示しましたが、佐幕派が討薩を目指し戦ったもの。

注2：大久保利通（生没年：1830－1878年）は、明治になり、同じ薩摩藩出身の西郷隆盛（生没年：1828－1877年）の征韓論を退けて内務省を創設。近代インフラ整備の基礎を造り上げます。

注3：幕府の勝海舟（生没年：1823－1899年）は、新政府が徳川家の存続などを認めない場合、新政府軍が江戸を攻撃する前に、町民を避難させ江戸を焼き尽くす作戦を立て、新政府軍の西郷隆盛と談判しました。

仮に、江戸が戦場になって内乱が長引けば、イギリスが、自国民保護を大義名分として江戸に進駐してきたかもしれません。そうなれば、横浜をイギリスに割譲せざるを得ない事態もあり得たと考えます。

なお、無血開城後に、淀川破堤、木曽川水系入鹿池決壊、天竜川破堤など、広域大水害が発生しています。新政府の最初インフラ事業は、淀川堤防復旧作業でした。

注4：大坂遷都は、大久保利通（薩摩藩士）の提案に木戸孝允（長州藩士：生没年1833－1877年）が賛同し、一旦決まったかに見えましたが、公家や京都の猛反対を受け頓挫。その一方、前島密（ひそか：生没年1835－1919年：越後の豪農出身、薩摩藩の蘭学講師）の進言で江戸遷都が有力となっていきました。

注5：1869年（明治2）時点では2府4藩3県でしたが、1871年（明治4）の廃藩置県により、1府8県（東京府、川越県、忍県、岩槻県、浦和県、小菅県、品川県、神奈川県、六浦県）が配置されました。

注6：国家主権は、1648年、ウェストファリア条約で登場した近代国家の概念の中で確立したもので、国際法の領域になります。徳川家光の時代から、西洋では、国際法が熟成されていたわけです。幕藩体制の日本は、開国するか、鎖国するかの外交決定権を誰が持つのかあいまいでした。加えて生麦事件など外国人殺傷事件発生時の処理を誰が行うの

かもあいまいでした。その国家主権の所在のスキを、欧米列強の老練な外交官たちに狙われ、右往左往したのが幕末の政治でした。

注7：薩摩藩が、討幕ではなく、横浜港の成功を見て、幕府に対して修好通商条約の中に鹿児島港の開港を入れろという条件闘争に転じておれば、南九州地方は、開国の恩恵と痛みを自ら昇華し、西南戦争での憂き目を見ず、アジア屈指のメガロポリスに成長していたかもしれませんね。

写真は、西郷・勝無血開城会見の碑（東京都港区芝 5-33-11、三菱自動車ビルの一角に存在）（細見撮影）

